

---

# 聖戦ロイア

当麻 紫苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖戦ロイア

### 【NZコード】

N98021

### 【作者名】

当麻 紫苑

### 【あらすじ】

千年前く混沌の時代」といわれていた頃、長きに渡り争い隣国ラスベルクと戦争を繰り返してきたロイア王国。だが、次第に敗戦の色が濃厚になつたロイアは王太子の戦死をきっかけにラスベルクに降伏、国王夫妻は自害をし、残された世継ぎの王女は戦火の中行方不明という悲劇を迎える。

復仇の思いを抱く王女エリン、戦術予報士を志す天才少年アスラン、謎の少年グドを取り巻く運命は。

## プロローグ

双狼大陸　　双頭の狼の形を抱く大陸　　に伝わる名高い言い伝え  
の中には次のようなものがある。

「白狼王」と「森ノ民」の娘のサー・ガ、「東狼の国」アルカシアの  
民族統一、売国妃の裏切りに遭い、いつたんは滅亡したローディア  
王国を見事に再生させた賢君「黒衣の王」の善政　など。  
だが、そのローディアにはもうひとつ伝説的な言い伝えがある。お  
よそ二千年の歴史を持つ由緒正しきローディアがまだロイア王国と  
呼ばれていた頃、千年ほど前に起きた出来事のことだ。  
後の世の人々は「それ」のことをこう呼ぶ。  
「聖戦ロイア」、と。

## プロローグ（後書き）

「この世界の「コングダの翼」とリンクする予定です。ただこれが  
ひたすらシリアルになるはず…  
感想等があつたらぜひ。

## オクタヴィアの物語

「母さま」

息子の声にオクタヴィアは我にかえり、視線をやや下に向けた。お互いそつくりな顔を持つ、双子の息子と娘 イリスとユーニスが大きな目を見開いてこちらを見ている。オクタヴィアは子どもたちに向き直った。

「なに？」

「母さま、このひとたちは誰？」

ユーニスは自分たちの目の前にある肖像画を指差した。先ほどオクタヴィアが見入っていた絵だ。

「これはね……千年前にこの国を建国した、建国王と王妃の若い頃の絵なのよ。千年前ローディアが作られてすぐに描かれた絵なの」  
だが その肖像画は奇妙だった。千年前に描かれたというのに古ぼけていなく、保存状態が良いとしてもいうはならないだろう。まるで昨日完成した とでもいうかのように額縁は綺麗で、埃も積もっていない。

そこには一人の男女、いや少年と少女が描かれてた。少年は黒髪に切れ長の、緑色の目の持ち主だ。見ているこちらを射抜くような目で不敵そうにどこか皮肉めいた微笑みを浮かべている。隣の少女は肩につくつかないかぐらいの長さの銀髪に琥珀色の持ち主だ。姿が代々のローディア王族の物なので、ローディア王家のの人間なのだろう。こちらはどこか幸せそうに微笑み、年相応の表情だった。共通しているのは一人とも目をひく、ちょっと珍しい顔立ちであることだろうか。イリスはそこまで考え、ふと疑問が浮かび口にした。

「でも、母さま。この人は緑の目だ」

「そう……建国の祖アスランは元々は平民の「森ノ民」の血をひく若

者だったと伝えられているのよ  
オクタヴィアの言葉にふたりの子どもたちせせりな顔を同時に  
傾げた。

「あなたたちが習つたローディア史ではそもそも触れないことだから  
知らないのも無理はないわ。……でもね、王家の代々の子どもたち  
は十三歳になると必ずこのく建国ノ間へに来て今から話すことを聞  
くのよ」

く建国ノ間へとは王都アレイラの王宮の、地下にあるく地下迷宮へ  
の中にある秘密の広間のことだ。この迷宮の存在を知るのは王族、  
それも直系の者だけなのだとイリスとコーニスはオクタヴィアに教  
えられた。

「あなたたちもこの国に伝わる伝承は知つていいでしょう?」  
オクタヴィアが唐突に話題を変えたため、イリスとコーニスは面食  
らつた顔になつたがコーニスがおずおずと答えた。

「はい、母さま。ええと……く黒衣の王へ、くイリスの娘へ、くリ  
クスルのアゴーラ王妃へ…」

コーニスが指折り数えて伝承を挙げるとイリスがそつと言い添えた。  
「…く聖戦ロイアへ」

「そう。今から話すこととは、その伝承のもつと詳しい話、建国の秘  
密についてのこと。なぜそれを今この場所で話し、なぜあなたたち  
が知らなければならぬのかは……この話、建国の真実を聞いたら  
分かるでしょ? …よくお聞きなさい。いいわね?」

普段は優しく穏やかなオクタヴィアの真剣な、まるで政治をしてい  
るときのような顔つきにふたりは驚いたが、しばらくして同時に神  
妙な表情でこくつと頷いた。

オクタヴィアは肖像画を見上げて奇妙な記憶をたどるような顔になりました。やがて口を開いた。

「 千年前 <混沌の時代>と呼ばれた時代があった。その頃双狼大陸は国同士の領土争い、内乱などで乱れた時期を迎えていた。かの有名なアルカシアの民族統一とてまだ成し遂げられていなかつたし、草原の国エレンシアではセルイアとの大規模な領土争いが勃発していた。その頃この国はまだロイア王国と呼ばれていた。……ロイアは隣国ラスベルクと長きに渡り争い、戦争を繰り返していた。休戦協定が結ばれたときもあつたけれどラスベルクは当時の国王サイオングが即位してから、頻繁に国境争いを始めた。……ロイアの当時の国王はアウルス・ロイア。アウルスにはふたりの子どもがあり、双子の王子と王女だった。名前はディーンとエリン。一卵性双生児の、よく似た双子だった。対するラスベルクのサイオングには三人の子どもがあり、王子がふたり、王女がひとりだった。リュオン、グディアス、レイリアという名前の子どもたちで、そのうち長子のリュオン王子には、長きに渡りロイア国民の憎しみを一身に集めることになる運命が待ち受けていた。……とはいってこの物語で主に語られるのはロイア王女エリン、ラスベルクの第二王子グディアス、それから戦術予報士を志していた少年アスランの三人だから、まずは王女エリンの話、すべての始まりの物語から始めましょう」

## オクタヴィアの物語（後書き）

リンダの翼で名前だけ登場した方たちです。  
次話から本編に移ります。

### 予定タイトル

- 一章 アレイラ陥落
- 二章 復仇の誓い
- 三章 グディアスとアディン
- 四章 神の手
- 五章 アレイラ奪還
- 六章 魂に響くもの
- 最終章 再生

# 一章 アレイラ陥落 1・悲劇への序章

「姫さまっ！」

リアンシェは自らもラスベルク兵に拘束されながらも必死に声を張り上げた。リアンシェの視線の先にはラスベルク兵に髪を捕まれて運行されてゆく乳兄弟の王女の姿がある。

「姫さま　姫さまっ！」

リアンシェの身を切るような悲痛な叫びにリアンシェを拘束していたラスベルク兵の目に哀れみのこもった光が浮かんだ。王女と引き離されたリアンシェは王女が引っ立てられて回廊の奥に向かつてしまふとがっくりとうなだれた。

ラスベルク兵は別方向に連れていくとリアンシェを促した。リアンシェはうなだれたまま大人しく運行され、ラスベルク兵からはその表情が見えない。

リアンシェはうなだれたまま床の模様を見続けていたが不意にそつと後ろを向き、王女の姿が回廊の奥に消えたのを確認すると何事もなかつたかのように床に視線を移した。

(……これでいい)

後は王女の機転と運に賭けるだけ　。

(どうか、あなただけは生きて)

リアンシェは生まれたときから常に側にいた乳兄弟の幸運を祈り、そして恐らくはもう彼女と会うこととは叶わないであろう己の運命を思い、ぎゅっと手をつぶつた。

「歩け」

ラスベルク兵　ラスベルク騎士団青蛇隊青騎士、レジナルド・デュレス　は王女の髪を掴んだまま愉悦を含んだ口調で命令した。

捕られた当初は暴れた王女も今は諦めたのかされるがまま、その美しい銀髪を無造作に掴まれていてもさして抵抗をしなかつた。

レジナルドは自らの幸運 長年争っていたロイアの今や唯一の世継ぎの王女を己が捕らえたこと に酔いしれていた。

ロイアが白旗を掲げ、王宮にラスベルク騎士団が入つてからまだ一時間も経っていないだろう。王宮入りしてまもなくロイア国王、王妃が共に自害しているのが発見された。ラスベルク軍総司令官たる第一王子リュオンの命によりレジナルドは青蛇隊小隊長の指揮のもと、ロイアの遺児エリン王女の行方を探索していた。元々王宮と名の付くものは広大なものである。王都アレイラが陥落してからさほど時間は経っていないとはいえ王家の遺児が秘密の抜け道を使って密かに落ち延びる、この「混沌の時代」と呼ばれていたこの時代ではさほど珍しい話ではない。リュオン王子は王宮入りし国王夫妻の自害の後を発見した後王家の遺児エリン王女の行方が掴めぬことを知ると早急に手を打つた。

ラスベルク騎士団に王宮のロイア兵残党を捕縛、抵抗するならば殺害せよ。このリュオン王子の命はすみやかに実行される。やがて王子は王宮を徐々に掌握、仮の占領軍司令部すらもうけてしまう。同時に王子はある命を伝令を通じて発令する。ラスベルク騎士団青蛇隊、紅蛇隊に王女の探索を命じ、発見しだいすみやかに司令部に連行するように。そして王子の命にはこうも付け加えられていた。もし捕らえたらけして傷つけぬよう、そしてけして逃がしてはならぬと。

リュオン王子の旗本隊からの伝令が届いたときレジナルドは密かに鼻を鳴らした。仮に捕らえたとして、ひ弱な王女を逃がすなどと、ラスベルク騎士団たる我らがそんな醜態をさらすとでも？ レジナルドはそう考へ、とはいへ自分だけが王女を見つける確率は高くないだろうと軽く考へていた。

だが、レジナルドの属する小隊がたまたま命じられた広大な王宮の

一角 レジナルドの見立てでは王族の居住区に押し入ったとき、王女と侍女らしき人物が逃げ延びようとしているところを発見した。そのとき王女をレジナルドが、侍女を小隊の後輩のジャニーイが捕らえた。……捕られた直後小隊長のジョウの喜び方は一種異様であった。レジナルドとジャニーイを褒めちぎり己が王子に報告する旨を小隊の騎士たちに伝え、レジナルドとジャニーイが捕囚の少女たちを連行するように言い置くと慌ただしくその場を後にした。

ジョウ小隊長は同郷の騎士だ。この小隊長、少々おつむが弱く上昇志向もさほどない、気が優しく仲間思いなやつで 悪く言えば人を出し抜くという発想がない 恐らくはリュオン王子に報告するときにレジナルドの名前をつげてしまう つまり自分だけ手柄を横取りする発想もない。今回の王女捕縛の手柄は少なからずレジナルドに入り込んでくる。その、まだ見ぬ「甘い蜜」にレジナルドは酔いしれていた。

「甘い蜜」のためにレジナルドはジャニーイを説き伏せて彼とは別の道でリュオンのもとに向かっていた。ジャニーイが向かった方向に行くと多くの騎士の目に王女をさらすことになる。もつと位の高い他の騎士に因縁をつけられて王女を取られてはたまらない。レジナルドはそう考へ、人気のない道を辿っていた。

幸いアレイラに進軍する前、アレイラ防衛の最後の防壁とも言うべきウイスレの地で王太子ティーンの首級が挙がった直後、ラスベルク騎士団の面々 各隊の隊長から下つ端の傭兵まで は王子リュオンの命により、王都アレイラ及び王宮の詳細な図を記憶させられていた。もつとも図をすべて記憶しきれた者はいないだろうが。レジナルドは平凡なラスベルクの王都の宿屋で生まれた男なのでラスベルクには兵役義務があるので

文字の読み書きはあやしかつたが、記憶力はめっぽう強かつた。今回はそれが幸いし、レジナルドは記憶を頼りに道を選んでゆつくりと足を進めていた。

(……ラスベルクの豚が)

レジナルドの下卑た口調と言葉を聞いたエリンは、その可愛らしい顔に似つかわしい言葉をレジナルドに向かつて心の中で浴びせながら密かに周囲の様子を窺つっていた。

先ほど捕らえられた、王女富から随分離れた場所に来ていたらしい。周りにはあまり人気がなく、恐らく他のラスベルク兵は国王夫妻が自害したという本宮の方に詰めているのだろう。

(父さま、母さま。ライアス。……リアンシュ)

父母、そして今現在自分が実行しているこの脱出計画を練りエリンに伝えた後父母を追つて自害をした戦術予報士（軍師）のライアス、最後まで自分についてくれた乳兄弟のリアンシュを思うとエリンの胸は熱くなつた。

だが、感傷に浸つて いる暇はない。

エリンはレジナルドに髪の毛だけを掴まれて歩いていた。拘束の常套手段の手の自由を奪う、をしないこのラスベルク兵の神経をエリンは密かに疑つていた。舐められているのか、油断しているのか：おそらくは両方だろう。エリンはレジナルドに気取られぬよう、頭を下げた状態で再び周りを見渡し ある物に目をとめてスッと目を細めた。

(見つけた)

エリンの命がけの逃亡劇が、始まる。

## 一章 アレイラ陥落 2・アレイラが泣いている

アレイラが、泣いている。

アスランは風にのって聞こえてくる人々の悲鳴、恨みをのんだ言葉、そしてラスベルク兵の下卑た声が己の耳を空虚にすり抜けてゆくのを感じた。

アレイラが陥落してから丁度一日が経つたが、アスランの住むアレイラのランス地区にはラスベルクの手はまだ届いていない。早馬で王都に、最後の防壁であるウイスレが陥落し、ディーン王子が落命したことが明らかになると王都は哀しみと怒りに包まれた。だが指揮官の王太子は死に、王都の守りの要、対ラスベルク戦において最後の砦と言つべきウイスレが陥落した今王都アレイラにラスベルク軍が侵攻するのはもはや時間の問題であるのは明らかだつた。ラスベルクは王都を包囲し、侵略前にいくつか条件を指定して降伏勧告を出してきた。国王アウルスは疲弊しきったロイア軍の状態、戦力……どれをとってもラスベルク軍との戦力差が拡がってしまったことを鑑みて苦渋の決断を下した。白旗をあげ、降伏をするといつ選択をしたのである。王都を戦火に巻き込むわけにはいかなかつたのだ……。

王都は、あっけなく落ちた。ラスベルク軍は王都に進軍し、ほぼ無傷の状態で王宮入りした。

だが ラスベルクは国王夫妻が自害をし、いまや唯一の世継ぎの王女エリンが行方知れずになつたためにアレイラの探索という名の略奪、もしくは暴虐の手を伸ばした。

国王の決断に涙しつつも占領軍の指示に従い従順に各々の家に引き籠もつていた市民たちを、ラスベルク兵は踏みにじつた。流石にラスベルクのリュオン王子は王族、貴族クラスの居住地区には手を出さぬよう言い含めたらしげ、もつと手の届く手頃な地区 下町

のあまり位の高くない者たちの住むファー・ディオ、ベルーラ、ランスなど　はラスベルクに蹂躪された。

そもそも長きに渡り争い、血を流してきたロイアとラスベルクである。両国の間で何度も繰り返し行われたロイア・ラスベルク戦役において、多くの兵が命を散らした。ラスベルクは多大な犠牲を払い、多くの同胞はなぶらを失つてようやく戦いの終止符を打つたのだ。アレイラを占領したラスベルク兵たちは親兄弟を無くし、心の奥底にしまいこんだ哀しみ、友が目の前で討ち死にし生まれた負のどす黒い感情を爆発させたのだ。その矛先が市民に向き、王都は暴虐の都と化した。

……もつともそのような高尚な理由もなく、ただ略奪を働いた輩もいなかつたわけではないだろうが……。

だが、直にここにもラスベルクの手は来る。

ランス地区は王都アレイラの、比較的身分の低い者たちが学問を開している地区だ。下町とはいえ、各国で名を馳せている高名な学者が私塾を開いているため、ランスには周辺諸国　ライドール、エルンシア、リクスル、「東狼の国」アルカシアなどから学生が学びに集まる所もある。恐らくそのことも、ランスにラスベルクが強引に押し入らない理由のひとつだろう。

今アスランのいる建物を含めて、ランス地区は非常に入り組み複雑な造りをした地区だ。だんだん人が増えるにつれて建て増しを行つてゆく内に奇妙な形の建物、裏通りが出来たのだろう。今ランスでは表向きは静かな様子ではあるが、裏通り、私塾の中などで人々は集まり秘密の集会を開いていた。

アスランもまた先ほどまで友人のレンやヒューらとともにロウ・コアン師の下に集まり今後のことに関する議論を交わしていた。

約二十分ほど前。

「　ね、アスランさん。もし…もしエリン姫さまが無事に逃げ

延びていたら……市民はどうなるんでしょうが?」

「どうなるつて……まあ、もし僕たち市民の誰かが姫さまを匿つていたと知れたら……匿つた者はなぶり殺しだろ?」

同門の後輩ヨーイの疑問にアスランは感情を殺した淡々とした口調で答えた。

アスランの言葉に卓を囲み、議論を白熱させていた少年たちは押し黙つた。

今、アスランたちロウ・コアン師の私塾の塾生たちはアスランの養い親のマリヤとハリイ夫妻宅にいた。少年たちはロウ・コアンの到着を待ちながら話し合ひをしていたのだ。

ロウ・コアンはアスランの養父ちやくのハリイとともに近所の私塾の老師、学者の集まる秘密の集会に参加していく。アスランの養母はやのマリヤは少年たちの傍の椅子で黙つて繕い物をしていく。

「でも、姫さまはどうやってラスベルク兵の手を逃れたんだろう?」ヒューは重苦しくなつてしまつた空氣を和らげようと話題を投げかけた。

王女エリンが王宮から行方知れずになつた事実をラスベルクは伏せていたが、市民たちの間では拡がりつつあつた。しょせん緘口令を敷こうと人の口に戸はたてられぬ、といふことだ。

もちろん市民たちは敬愛する王女がラスベルクの虜囚にならなかつたことに、一縷の希望を見出していた。

今のランス地区では王女の行方についてがもつとも議論されているに違いない。

「……だつてさ、王宮にはラスベルクの悪魔どもがうじやうじやいるんだぜ?姫さまひとりで逃げるのってどう考へても無理だろ?」

「でも、実際姫さまは逃げちまつてゐてえだし……ラスベルク兵だって今捜索してゐるつてラドュ・ルイ塾のシリルがさつきかゝつてたじやねえか」

「でも……エリンさまがもしランスに来たらさあ、みんな匿うのかな」レンの言葉に黙つて縫い物をしていたマリヤは顔あげてレンを睨

んだ。

「…國民あたしたちが姫さまをラスベルクの豚どもに渡すわけないじゃないか。あたしは姫さまを売るくらいなら舌を噛み切ることも厭わないよ」「わかつたわかつたおばさん… そう本氣マジな目になんないでよ」

レンは肩をすくめマリヤはあたしは本気マジや、と言い縫い物に戻った。

(…確かに、エリンさまが王宮をひとりで逃げ出せるとは思えない)アスランは先ほどのヒューの言葉に心の中で同意し、手すりに寄りかかって景色を眺めた。

(そもそも 頭かぶがそうとう切れるとこココオノ王子が退路を絶つてないわけがない)

だが、現実王女はラスベルクを出し抜いて現在も行方知れずなのだ。アスランは己の黒髪をくしゃりとかき、常の彼からしてみれば珍しく苛立つた表情で目を細めた。

(分からぬ。どうして…)

「この僕が予報に詰まるなんて」

アスランはうつとりするような緑色の瞳で屋上から見えるランスの景色を見渡したがそこには変わらぬランスの町並みが見えるだけだ。アスランの頭の中には先ほどのマリヤの鋭い言葉が響いたままだった。

いか  
…國民あたしたちが姫さまをラスベルクの豚どもに渡すわけないじゃな

同時にある言葉も響いていい。目を開じると脳裏にキラキラした銀と琥珀色が浮かんだ。

アスランは優しいね……

「僕は あんたを死なせたくない」

アスランの呟きは闇の中に響き、誰にも聞かれることなく消えた。

やや冷たい風が煮え立つたアスランの頭をゆっくりと冷やしたのか。

( 仮にエリンさまが逃げたとして、何処に逃げる? )

アスランは真顔になり、いつもの予報をたてるときのクセ 無表情になり、右親指の腹を左一指し指でこする を始めた。

王女のひ弱な足では地方へ落ち延びる以前にこのアレイラから逃げるのも無理だろう。

なら、この多くのラスベルク兵のいるアレイラの誰を頼る?  
アスランは指をこすり続けたが、不意に手をとめ、頭に浮かんだ答えを口に出す。

「ユアン師!」

どうして気がつかなかつた?そもそも自分が予報士を目指したのは

「…くそつたれ!」

アスランは口をののしり、手すりから離れると備え付けの階段へ走つた。

## 一章 アレイラ陥落 2・アレイラが泣いている（後書き）

アスラン、登場です。影の薄いエリンよりめだつてますね…  
次回はこの話で語られているエリンの逃亡劇の話の予定です。

### 補足：アスランの容姿について

アスランは文にある通り黒髪に緑の目の容姿です。  
「[リンダの翼](#)」のリンダやアリオスのように、「あの一族」の血をひいているわけですが、混沌の時代ではある一族の存在はあまり明かされていません。なので混沌の時代の人々の間ではちょっと珍しい容姿だ、という程度の認識です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9802i/>

---

聖戦ロイア

2010年10月14日14時15分発行